
あの夏のわたしたち

石田多紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの夏のわたしたち

【Zコード】

Z6582C

【作者名】

石田多紀

【あらすじ】

夏休みが終わるころ、伯父がアンドロイドを作り出した。従兄のために。それは本当に、人間そっくりだった。先に載せた「天使なんかじゃない」の、対になります。よろしけつたら、読んでみてください。

今朝の新聞に、実用可能なandroイドの記事が載っていた。そのandroイドは、成人男子とほぼ同じ体格をしていて、歩いたり座ったりをこなし、挨拶や物の色を識別して答える程度の、簡単な会話さえ可能だといふ。

これは画期的なことだと、新聞は告げていた、androイド、といふか人工知能の研究にとって、長足の進歩だと。

私は、五年前に我が家にいたandroイドのことを思い出した。天才とも奇才とも呼ばれていた伯父が作り出した、コーラインという名のandroイドのことを。

そして、従兄の隆人のことを。

私は小学校の頃から、伯父の家で育つた。両親を交通事故で亡くしたのである。隆人と私も、その車に乗り合わせていた。私たちは運良く助かっただが、隆人には障害が残つた。下半身と左手に麻痺が残り、彼は車椅子の人となつた。

伯母はもともと過保護な人であつたというが、この事故から後、盲愛的になつた。加害者の娘、しかもかすり傷で済んだ私を決してこころよくは思わず、虐待こそしなかつたが、まったく無視した。伯母の生活は隆人にいを中心回り、隆にいの具合の悪いときには、一緒に寝込んでしまうほどであった。

隆にいと私は、仲がよかつた。

四つ違ひのこの従兄に、一人っ子の私はよく懐き、どこに行くにも後ろをついて回つたのを、覚えている。あの日、強引にドライブに誘つたのも、たぶん私であり、だからこそ伯母は、私を抹殺したかったのかもしれない。

隆にいが、私のことをどう思つていたのか、結局のところ、わからぬ。

あの事故の後、彼とはめったに話をする機会がなかつたのだ。それは伯母が、私をそばに寄せつけなかつたためもある。だが、私がただ一人、無傷で助かつたことに負い目があつたのは事実だ。

伯父は、私を可愛がつてくれた。

あの広い家の中で、それはずいぶんと救われた。

伯父は、人工知能の研究者だつた。大脳生理学者の土台を生かし研究は、その道ではかなりの物だつたという。ある企業の援助で、自分の研究所を持っていたほどである。

ここに遊びに行くのが、私は大好きだつた。

たくさん並んだPCやら模型やら、迷路図のような大脳地図やらコードのたくさんついた脳波計やら……。伯父は伯父で、私のデータを取つてもいたようだつたが、いやではなかつた。そのかわりに好きに見せてくれた一つずつのドアの向こうに、そんな物が隠れていて、遊園地のからくり屋敷のような魅力を感じていたのだ。

私の母より十以上も年上のこの主は、小さい私と息子を抱いて、よくこう言つた。

「いいかい、そのうちに、アンドロイドが現れる。いいや、アンドロイドという名前ではないかもしないがな。それは、危険なことや力のいる仕事を援助するようになる。あるいはもつと身近に、生活そのものを援助するかもしない。だがな、これだけはいえるぞ。そいつらは、どんどん感情を持つていく。人と交わることで、人に近づいていく。これだけは、間違えないぞ。なにしろわたしが、作つてゐるんだからな」

夏だつた。

隆にいが、しばしば呼吸困難を起こすようになり、ほとんど寝つきりの生活となつた。湾曲した脊椎が、呼吸中枢を圧迫するようになつてきたのだ。

伯母は半狂乱となり、隆にいに付ききりとなつた。ヒステリー症

状で失神することもあった。無視どころではない、私ははつきりと、攻撃対象となつた。

伯父だけが頼りだつたが、この時期、ほとんど家には帰らなかつた。

隆にいよりも、たぶん伯母の状態を心配した主治医が、転地療養をすすめた。町中のこの家ではなく、静かな湖畔の別荘で暮らすことを、推したのだ。

隆にいと伯母は、すぐに別荘に行き、戻つてこなくなつた。伯父は五日間を研究所で過ごし、週末を別荘で送るようになつた。

私は、別荘には、行かなかつた。

苦しむ隆にいを見ることも、伯母の田に射すべめられることも、どちらも怖かつたのである。

あの夏、来週には学校が夏休みになるという最後の木曜日、伯父が家に戻つてきた。

まつすぐに私の部屋に来ると、緊張した面もちで、言つた。

「支度をしなさい、真由子。隆人が、危篤だ」

別荘は、家から車で一時間、湖を見下ろす高台にある。ぐるりを林に囲まれた、こんな気分でなければ、ずいぶんと快適なところだつただろう。

車から下りた私と伯父は、とる物もとりあえず、中へ入つた。

一階は、しんとしていた。

「伯父さん……」

私は不安になつた。

もしかして、間に合わなかつたのではないかと、そつ思つた。

「一階だよ」

伯父は力強くそついつて、私の手を握つてくれた。その手はじつとりと湿つていて、彼も不安であることがわかつた。

私たちは広い玄関ホールの奥にある階段に向かつた。家政婦の牧瀬さんが、左手の方から出てきた。

「牧瀬さん、隆人は」

「先ほど高木先生が見えて、もう大丈夫だろ」と。それより、奥様が

「郁江が?」

伯父はさらに緊張して、階段を駆けるように上り始めた。

その時だ。

一階から、水差しを片手で持った少年が、下りてきたのだ。

年の頃は私と同じくらい。

肩までの髪を無造作にゆらし、白いTシャツとジーンズをはいていた。

いや、私の目を引いたのは、そんなことではない。
彼は、どこかおかしかったのだ。

私たちを見下ろしながら、その視線は、どこにも合っていないような、そんな雰囲気があった。

「ユーユーイン」

伯父が呼びかけた。

少年はこくりと頷き、そのまま階段を下りてきた。

「ユーユーイン、郁江はどうした」

「奥様はお倒れになり、今は高木先生が見ていらっしゃいます。」

「隆人は」

「隆人様は意識を取り戻され、今は眠つていらっしゃいます。隆人様については、もう少し寝かせておくよ」と言つのが、高木先生の「ご指示です」

声 자체は、どうということもなかつた。しかしその聲音というか、アクセントというかが、おかしかつた。どこにも感情のこもつてない、平坦な、声。

私は彼から目が離せなかつた。

伯父は、そうか、といつと、ふうとため息をもらつた。それから私に向いて、彼を指さした。

「真由子、紹介するよ、彼はユーユーイン」

「…ゆーいん？」

「そうだ。隆人と郁江の世話をしている」

「いつそんな人を雇つたのだろう。今までは牧瀬さんと和子さんしかしなかつたのに。それにどうして、こんな男の子を雇つたのだろう。私とそう変わらない年のはずだ、それは子供ではないか。

怪訝そうな顔をしていると、伯父が、すぐ耳元で声を潜めた。

「アンドロイドだ、真由子」

「！？」

「声を出すな、ほかの者は知らない」

伯父はすばやくそう言つたが、もとより声など、出なかつた。少年はゆつくりと階段を下りてくると、私の横に立ち、正確に三十度、頭を下げた。

「どうぞよろしく、真由子様」

私は驚き、ただ彼を見つめることしかできなかつた。すると彼は、つと視線をはずし、そのまま階段を下りていつてしまつた。

「驚いたか、真由子。だがこの話しさ後だ。とにかく郁江と、隆人に会わなければ」

伯父の言葉に、何とか自失状態から抜けた。

「そうだ。とにかく隆にいと、それから伯母さんだ。すべてはそれからだ。」

隆にいの部屋は二階の左端にあつた。まず伯母にあつて来ると伯父は言い、「私は一人で部屋の中に入り、ベッドのそばに、おそるおそる立つた。

彼は楽そうな呼吸をして、静かに眠つていた。

私が想像していたよりずっとずっと穏やかなその様子に、ほつとした。

「……真由子」

私が顔をのぞき込むのとほぼ同時に、隆にいは目を開いた。穏やかな声だった。

私が聞いたことのない、とても穏やかな声だった。

「よかつた。心配したよ、隆にい」

「心配、かけたんだね。」「めん、もう、大丈夫だよ」

「隆には、ゆっくりとそう言った。」

私は驚き、そしてとても嬉しかった。

あの事故以来、こんなに優しい隆には初めてだったのだ。話しをすることを、久しぶりだ。いつもは伯母が、そばに寄せてくれなかつたから。

「どうしたの。僕を心配しててくれたのだろう」として彼は、微笑んでさえ、くれたのだ。

転地療養を勧めてくれた高木先生に、思いきり感謝したい気持ちだつた。この高原での穏やかな生活が、隆にいをこんなに穏やかにしてくれたのだと、素直に信じたのだ。

「隆にい……」

「きてくれて、嬉しいよ、真由子。」「」は静かで、いい所なんだけれど、母さんと二人きりだら、退屈で……」

「いいの隆にい、私、ここにいてもいいの？」

「おかしな事を、言うんだなあ。もちろん、いいに決まつているさ」

隆にはベッドに横になつたまま、もう一度笑つた。

その笑顔があまりにも優しかつたので、私は彼に、抱きつくなつた。

そのゆがんだ身体を、心から愛おしく思つたのだ。

「隆人様。」

その時だつた。

いきなり背後から声がして、私は驚いて彼から離れた。振り返ると、そこにさつきの少年が立つていた。

いつ入つてきたのか、全然気がつかなかつた。いつからそこにはたのか、まったく気配を感じなかつたのだ。

「コーラインか」

しかし隆には、別に驚いた様子もなく、少年の名を呼んだ。

そうだ、コーゲイン。

そして伯父は、この少年をアンドロイドだと呟つたのだ……。

「何だ」

「お薬の時間です、隆人様。真由子様は、一階の書斎で、旦那様がお呼びでした。」

「そうか」

隆にいが返事をすると、少年は あるいはアンドロイドはまっすぐ私たちの方へ歩いてきた。両手で水差しと薬包の載つたトレーを持っていた。

私は、その動きを、じつと見つめていた。

目が、離れなかつたのだ。

それはなめらかに、何一つ違和感を感じさせずに、歩いた。

バランスのよい姿態をし、どこにも機械らしさを感じなかつた。整つた顔立ちをしていたが、それだつて、決して作り物めいはいなかつた。

上手に私を避けて、それは隆にいのそばに立つた。水差しからコップに水を注ぎ、隆にいに渡した。

正確な、しかしここにも無理を感じさせない動作だ。

「真由子」

私が呆然としていると、コップを受け取つた隆にいが声をかけた。

「真由子、書斎は、一階の右の端だよ」

「あ、ああ。ありがとう、隆にい……」

視線を戻し、でも何にも合わせられないままに、私は部屋を出た。混乱したまま、伯父の書斎に向かつた。

伯父は、私をからかつたのだろうか。どう見たつて、あれは人間であつた。

その量感も質感も、動きも声音も、人間の物であつた。

あの圧倒されるような無表情がなければ、私はこんなに迷つたりはしなかつた。

「伯父さん！」

ノックもせずに、私は伯父の書斎に飛び込んだ。伯父は書類から田を離すと、手を差し出した。

「おお、真由子。隆人は、どうだつた？」

「あ、ええ、とても具合が良さそうだったわ。危篤なんて信じられない。伯母さんは？」「郁江はまだ混乱している。会わない方がいい。わたしたちが着く前は、大変だつたようだよ」

伯父にいきなり隆にいのことを聞かれ、何となくコーラインのことを切り出しにくくなつた。

「その……、伯父さん？」

伯父もまた、何か言いたいことを言ひ出せないようすで、書類の上を何となくさまよつてゐる。

「なんだ」

明らかにほつとした様子で、応えた。

「あの、アンド、ロイド、の、事なんだけど」

「おお、そのことか！」

伯父はぱぱっと顔を輝かせて、とたんに饒舌になつた。

「あれはな、最新の樹脂を用いて外見を仕上げてある。だから、皮膚の感じも爪や体毛も、ヒトにそつくりだろつ。身体の方はな、さほど苦労しなかつたが、顔には苦労した。表情といつ物が、あんなに難しいとは、思わなかつた。あの顔の下に、一体何本のソフトチューブとファイバーが潜んでいると思う？ ヒトの筋原纖維以上だ！ それを持つてしてやつと、あの豊かな表情を生み出せる。

しかしながら、中核知能だ！」

あれは、幅聴覚はもちろん、立体視だつてできる。匂いまでは、さすがに無理だがな。あの身体すべてがセンサーと言つてい。それから得た情報を、統合し出力するための中核！ わたしの長年の研究の成果のすべてだ。

さすがにあの小さな体の中には収まらなかつた。だから本体は：

…」

「じゃあ

私はろくに聞いていなかつた。
それではやはりあれば。

「アンドロイドって、本当だつたの」

「……なんだと思ったのだ。隆人は……」

「隆には知つていいの？」

「いや、コーラインがアンドロイドだつて事をか？ もちろん、知つているさ。私と隆人と、そしておまえだけだ、真由子」

伯父は立ち上がり、私の横に並んだ。

「真由子。隆人は、そう長くはない」

「え？」

私は伯父を見上げた。

伯父は、決して私の方を見ようとはしなかつた。

「もう、あの体重を、隆人の心臓は支えきれない。今は元気だ。だがそのうちベッドから起きあがれなくなり、ろうそくの火が消えていくように、静かに最期を迎えるよ」

「そんな、」

何とも答えようがなかつた。

隆にいが、いつかは死んでいく、だらう事は、漠然と理解しているつもりだった。彼が、こわれ物の陶器であることは、あの不自然な体つきからも、十分考えられたのだ。

しかし実際にそうと告げられることがあるとは、考えていなかつた。

考えられなかつたのだ。

「その日は、必ず来る。今の調子は、ろうそくの火の最期の輝きだよ。今のうちに、十分元気な姿を見せてくれなくては、困る」

伯父はそこで私に向き直り、強い目で念を押した。

「そのために、コーラインは、絶対に必要だ」

伯父の言ひたかったことは、これだつた。私に、コーラインを認知させたかったのだ。

「わかるな、真由子」

「……わかる……」

「ほかになんと答えればよいのか。

コーラインと接するにあたって、伯父は私に一つを約束させた。

いきなり身体に触らないことと、髪に触らないことだった。

「あの髪は、いわばリモコンの受信部だ。触ると動きに乱れが出るかもしだれん」

要するに、隆にいと変わらないことだ。

隆にいも、いきなり身体に触つたりおどかしたりしたら、心臓に障るといつので禁止されていたし、髪というか、頭に触るのは、隆にい自身が嫌がったのだ。

コーラインを、すぐに受け入れたりはできなかつたが、その存在を何となく認めるようになつていつた。認めたくない気持ちは強かつたが、隆にいの世話にコーラインが適当だといつのは、確かだつた。時間に正確で、沈着冷静で、力が強い。

情にほどされず、正確で、緻密。

隆にいを軽々と抱き上げる力は、私にも和子さんにもなかつたし、隆にいの小さなわがままを情に流されずこなすのは、やはり私たちには荷が重かつた。

伯母さんはいまだに寝込んだままだつた。その間、私は日中のほとんどを、隆にいの側で過ごした。

その側に、ぴつたりと、コーラインが控えていた。

私がはしゃぎすぎたり、隆にいが興奮してきたりすると、決まって冷たい声で、「お控えください、真由子様。」と、言つた。そのたびに小さな不快感を覚えたが、逆らつたりはしなかつた。その忠言がいつも正しいことは、半日としないうちにわかつたし、コーラインは決して、むやみになんでもを禁止したわけではなかつたからだ。三日間は、楽しいうちに過ぎた。コーラインが、にやりとすることもあつた。伯父の言う豊かな表情というのとは、この程度なのかなと、多少情けない気もしたけれど、そのにやりには、こくらか暖かみが

あるよつた氣をえ、だんだんしてきたのだ。

そして四田田、伯母が起きあがつた。

その日も私は、隆にいの部屋で時間を過ぐしていた。もちろんコーンインが側に控えていたけれど、私はもう、彼のことをほとんびんにしないよつになつていた。

そう、彼、と呼べるほど。

私たちは他愛のない話をして、くすくすと笑いあつた。学校での話しが主だつた。以前なら、隆にいの氣に障るのではと、その手の話しさけてきたが、このじりでは隆にいの方から、それを望んだのだ。

「奥様、まだ起きあがつては」

和子さんの興奮した声が廊下の方から聞こえてきた。

伯母なんだ。

伯母が、ここへ来よつとしているのだ。

私は緊張して、思わず立ち上がつた。

私がここにこゝへしてこることを知つたら、伯母は一体、なんと思つだらう。なんにしる、よくは思わないに違ひない。私を息子に近づけまいと、あんなに努力してきた人だ。何を言われるかわかつた物ではない。ここに私がいることは、伯母にとつてはひどく腹立たしいことじでしか、ないはずだ。

「ど、どつじよう

私はおろおろとして、すぐこでも部屋を出よつと黙つた。しかし伯母の声は、もうすぐそこへ聞こえており、とても余わざに済ませずには、こゝれそつにない。

「真由子」

その時、隆にいが言つた。

「な、なに？」

「君は、ここにこゝるといつよ。どつじよも、帰る必要は、ないよ

「でも」

「いや、真由子は、帰つちゃだめだ。そつだな、コーンイン

「はい。隆人様。」

私はびっくりした。

隆にいが、伯母に逆らうようなことを言つたのはもちろん、その途端にユーラインが立ち上がり、ドアを開け始めたからだ。

「ユーライン、私まだ、心の準備が

「隆人！」

その途端に、伯母が、部屋に入つてきた。ユーラインを間に、私と伯母はまともに向き合つてしまつたのだ。

伯母は、確かに常軌を逸していた。

部屋着のままだつたのはともかく、その目が、常態ではないことを告げていた。

確かに以前から、伯母はまともとはいえなかつた。私が隆にいに近づいただけで、ヒステリーを起こし、ひどいときには失神もした。しかし、ちゃんと私を認識はしていたのだ。

「伯母さん……？」

確かに私と向かい合つている。

しかし彼女の目は、決して私を見てはいなかつた。焦点の合わない見開かれた目は、私をすり抜けて、隆にいを見つめていた。

「隆人！」

伯母は私に、どんとぶつかつた。ユーラインが抱きとめてくれた。私は呆然と、伯母を見つめた。

彼女には、私は見えないのだ。

彼女の目は、すでに私を透かし、隆にいだけを捉えたのだ。

「ああ、隆人、ほらご覧なさい、やっぱりあなたは元気じやないの！」

たぶん私は、震えていたと思う。

伯母は隆にいをしつかりと抱きしめ、何度も何度も頬ずりを繰り返した。

その動作はぎこちなく、しかし執拗に続き、私はショックで立つていられないほどだつた。

「ヨーインが、柔らかく抱きとめていてくれた。柔らかく、優しかった。」

「何かお飲みになりますか、真由子様。」

「ううん、いらない、ありがとう」

私を支えて、ヨーインは部屋まで送つてくれた。まともには、歩けなかつた。

「ヨーイン、伯母さんは、いつからああの？」

「ああ、とは、どのような状態でしょうか。」

「いつからあんな風に、隆にいしか見えていないのかつて事よ」

ヨーインに導かれてベッドに座りながら、聞いた。

「奥様が常態ではないと判断されたのは、隆人様が危篤に陥つてからです。隆人様が意識不明になられるとともに、奥様もお倒れになり、以来常軌を逸しています。一時は旦那様も認識できませんでしたが、一度目の混濁常態から脱されました下り、旦那様を認識されました。」

「……そう」

つまりあの人は、隆にいしか見えていなかつたのだ。私を憎んでいたはずなのに、実はそれさえ、どうでもよかつたのだ。

私は別に、伯母を慕つてはいなかつた。

だがこの事実は、かなりショックだつた。

子供だったのだ。

子供だから、憎んでてもいいから、気にかけていてほしかつたのだ。

泣いていた。

なぜ涙が出るのか、その時には理解できない涙だつた。

ひとしきり泣いた後で、まだそこにヨーインのいることに、気がついた。

「大丈夫、私は大丈夫よ、ヨーイン」

ヨーインは黙つたまま、くるりと後ろを向いた。

「コーライン」

自然と唇をついた。私は彼を呼び止めていた。

「ありがとう」

「わたしは人形です。真由子様がわたしに礼を言われる必要は、いつさいありません。」

なぜか、苦しそうに聞こえた。

彼はそう言つと、静かに部屋を出ていった。

私は、彼の消えたドアを、しばらく見つめていた。

この時から私は、真剣にコーラインを見つめ始めた。これまで、隆にいの世話をする物としか捉えていなかつた彼を、それ 자체として見つめだしたのだ。

隆にいには伯母がつきつきりとなつたが、就寝前にだけ、会つことができた。

隆にいが眠つたふりをする。すると伯母は、安心して浴室に戻る。そうしてから、コーラインがじつそりと、私を呼びに来るよつになつていた。

最初は病氣に障るのではと、早々に切り上げていたが、一二三日もするうちに、すっかり慣れてしまつた。何より、隆にいが笑つてくれるのが、一番嬉しかつた。

こんな時コーラインは、すぐ側に、静かに控えていた。隆にいが興奮してくると、「隆人様。」と、冷静な声をかけるのだ。

その声にも表情にも、色はなかつた。

しかし私は、かえつてその無表情に、違和感を感じるようになつていた。

あの、苦しそうな声は、なんだつたのか。

私の思いこみ、勘違いだつたのか。

いいや、そうではない。

あのときの彼こそ、伯父の言つていた、だんだんに感情を得ていくといつことだつたと思つ。では、ここに今いる彼は、いつたい何

なのだらうつ。一度得た感情を、彼はなくしてしまつたのだらうか。そんな物なのだらうか。

そのうちこ、自然と一つのことを考えるよつになつた。

「コーアイン。

伯父が造り出した、世界初のアンドロイド。彼は本当に、人間ではないのか？

夏休みを半分も過ぎたころ、私は久しぶりに、伯母と顔を合わせるようになった。朝や夕の食卓にて、出でてくるよつになつたのだ。

「おはよう、真由子ちゃん」

しかもその口は、驚いたことて、私に挨拶までしてくれたのだ。それも、和やかな声で、である。

「お、おはようございます」

私は吃驚して、どもつてしまつた。

「あの人はねえ、今日も帰らないんですね。いくら研究といつても、週の半分以上もいらないなんて、ひどいとは思わない？」

「え、は、はい、ええ」

あの人というのが伯父のことだと、やつと気がつく。

「隆人も、最近ではずいぶん体調がいいの。真由子ちゃんも、部屋にきてやつて頂戴ね」

これは、ずいぶんの変化だ。

あの、伯母が！

私を嫌い、無視してきた伯母が。

私はしばらぐ、伯母の顔を見つめてしまつた。それこそ、伯父がアンドロイドでも造り出したかと思ったのだ。

「なあに、わたしの顔に、何かついている？」

「喜んで、お部屋に行かせてもらいます！」

私は椅子から立ち上がり、そう叫んだ。

声がひっくり返つていて、それくらい、嬉しかつた。

「コーライン！」

さつそく隆にいの部屋に向かつた私は、ドアの前に立つていたコーラインを見つけ、その身体に抱きついた。

「コーライン、伯母さんがね、隆にいの側に行つてもいって、言つてくれたの！」

「そうですか。」

彼は持つていた水差しを身体の横にそらし、器用に身をひいた。
「隆にい、ずっと調子良さそうだものね。それもあなたのおかげね。まつたく伯父さんは、いいものを造つたわ。隆にいの調子いいのが、その証拠よ。」

今度は、コーラインの肩をつかんだ。

彼は水差しを持つた手を手品のように操つて、再び私から逃れた。
「そうですか。」

その声はとても平坦で、私ははしゃいだ気分に、水をかけられた
ような気がした。

「何よ、ずいぶん冷たいわよ、その言い方は」

鮮やかに身をかわされた悔しさも手伝つて、私は言いつのつた。
「伯父さんはあなたを感情豊かに造つたと威張つていたけれど、それは失敗よね。あなた、ちつとも表情変わらないし。さわり心地はいいけれど。思つたより柔らかいし。

ほらあ、こいつう時はこいつ笑つて、よかつたですね、つてい
うものよ。」

私は、コーラインの顔を下から覗くように、見つめた。
はつとした。

彼の目は閉じられ、それからゆっくりと開かれた。

「わたしは、隆人様の人形です。柔らかくても当然です。感情とい
う言葉は、わたしには理解できません。」

しかし私は、見逃さなかつた。

無表情を装つたその唇の端が、かすかに震えていた。
目に、怯えの色があつた。

私が伯母の前で見せていたのと、同じ色の。

「コードイン」

考えるより先に、言葉がでていた。

ついいと向けた彼の背中に向かって、私は言つていて。

「あなた、本当に、アンドロイドなの……？」

それからしばらく、コードインを見なかつた。

伯父は定期点検だといった。

私たちは、たいていの時間を隆にいの部屋で過ごした。

私と伯父と、伯母とある。

隆にいはあくまで機嫌がよく、だから伯母は落ち着きを取り戻し、私たちは、本当の親子のようだつた。

家では考えられないことだつた。この日々がいつまでも続かないかと、本気で願つた。無理だということは、わかつていた。

私たちは、不安定なガラス細工だ。

何か一つでもバランスが崩れれば、こなごなに砕け散つてしまつのだ。

不安で不安で、だから私は笑つていた。

この不安定な関係の中での、いつまでも笑つていたかつた。

来週から学校が始まる、水曜のことだつた。

その日もまた、私たちは隆にいの横で、ベッドを囲んで一日を過ごした。

今日の隆にいは、いつもよりはしゃいで見えた。苦しそうな呼吸で笑い、あえぎながらも、機嫌がよかつた。最近ではすっかり常軌に戻った様子の伯母が、彼の背を優しくさすりながら、微笑んでいた。

「ああ、楽しかつたよ、ありがとう」

隆にいはにこことそつ言い、少し疲れたと、いつもより早く寝入つた。

夕食をとった後、私は自室で宿題と取り組んだ。そしてそろそろ寝ようかという時に、ドアがノックされた。

「誰？」

ほんの少しの不安。

「失礼いたします。」

「……コーライン」

それは久しぶりに見るコーラインだった。

相変わらずの、仮面のような無表情だった。

コーラインは、正確に一礼してから、言った。

「お支度を、真由子様。二分前に、隆人様が、息を引き取られました。」

それからしばらくの事は、よく覚えていない。

確かに隆にいの部屋に駆けつけたのだと思うのだが、何をしたのか、隆にいがどんな姿をしていたのか、まるで思い出せないのだ。

覚える必要がなかつたとも、いえる。

私たちは、いざれこの口が来ることを、あらかじめ知つていた。だからこそ、残りの日々を楽しく過ごそうと懸命だった。

葬儀の日、伯母はしつかりとしていた。

人々の弔問を、上の空とはいえ、ちゃんと受けていた。伯父が、伯母のそばを片時も離れなかつた。しかし、私が初めて別荘に着いた日のように、取り乱してはいなかつた。

コーラインがいて、よかつた。

虚しい隆にいの遺影を見ながら、私は思つた。

彼がいたから、隆にいはあんなに元気になれたのだろう。隆にいの笑顔をみられたことで、これからもたぶん生きていける私たちは、彼に許しを乞うための、自己満足でしかない猶予時間を与えたのだ。

コーラインに会いたい。

私はそれだけを考えていた。

会つて、隆にいのことを、思いきり話し合いたかった。
しかし彼は、どこにもいなかつた。

家の中にも葬儀の会場にも、彼の姿はなかつた。

「ユーラインは、解体するよ」

やつと落ち着いたころに、私は伯父に、ユーラインの行方を聞いた。
すると伯父は、思つても見なかつたことを言つたのだ。

「解体つて……」

「隆人は死んだよ、真由子。もう、ユーラインの役目は終わつたさ」
書斎の椅子に深々とかけた伯父は、ずいぶんと年をとつて見えた。

「でも伯父さん、解体つて、どうするの。」

「だつて、ユーラインは……」

一度は躊躇した。

だが、言つた。

疲れたような伯父に、私は言つた。

「だつてユーラインは、人間でしょ、う？」

伯父の肩が、びくりと震えた。

私の視線を力無く受け止めた。

私は、ほおつと、息を押し出した。
そう。

ユーラインは、人間だ。

だつて、アンドロイドのはずがないのだ。

「わかつた、真由子。

ついてきなさい、ユーラインに、会わせてやろう。」

考えてみれば、簡単なことだつたのだ。

ユーラインがアンドロイドだというのは、伯父とユーライン自身だけ
が言つてゐることであつて、誰もその証拠を見たことはない。

反対に、彼が普通の人だと考えればごく自然なことが、いろいろ
とあつた。

伯父の、常識では考えられない能力が強い煙幕となつて、そんな途方もないことを信じさせていたのだ。

伯父は、研究所に向かつていた。

車の中で、私たちは無言だった。

伯父に言いたいことはたくさんあつたが、今はその時ではないと、思った。すっかり面やつれした伯父は、いたわるべき老人と、私に感じさせたのだ。

「ユーユーインは、一階の仮眠室にいるよ」

私と視線を合わせず、伯父が言った。

「伯父さんは？」

「後で行くよ、真由子。いろいろと……。そう、いろいろと、片づけねばならないことがあってな」

私は頷き、一人で仮眠室に向かつた。

仮眠室は、一階の奥にある。家に帰つてこないとき、伯父はたいていここで過ごし、研究について考えるのだ。私も、ここに泊まり込んだことがある。伯母との関係に、まだ悩んでいたことだ。

「ユーユーイン」

ドアを静かに開けて、中に入った。

ユーユーインは、そこにいた。

はじめ驚いたように立ち上がつたけれど、私と視線が合つと、静かに笑つた。

「……あなたがここに来たということは、わたしはもう、お役御免ということですか？ 真由子様」

「そうよ、ユーユーイン。もう、いいのよ」

私も、静かに微笑みを返した。

微笑みながら、泣いていた。

ユーユーインは浅くベッドに腰掛け、私にも座るよう促した。

「あなたは勘がいいから、すぐに気づいてしまうかもしれない」と、

博士はおっしゃったのですが。

「いつ頃、気がつかれたのですか」

「あの日の、一週間くらい前よ。私、言つたわよね。本当にアンドロイドなのがつて」

「ああ、やはりそうでしたか」

ゴーインのすすめに、手近の椅子に腰を下ろした。私たちは、ぽんやりと視線を混ぜ合わせていた。直接は、あわせられなかつた。そしてまた、逸らすこともできなかつた。

でも本当は、もつと前に気づいてよかつたのだ。あるいは、最初に彼にあつたときには、すでに解つていいべきだつたのだ。

伯父は言つていた、いつかは、アンドロイドがでてくるだらうと。でもそれは、いつかの話で、昨日今日の話ではなかつたではないか。いつも何でも、伯父は話してくれていた。アンドロイドが出来上がつたのならば、もつと色々なことを、話してくれてよかつたのだ。

「あの後わたしは、あなたに会つのが怖かつた。わたしがアンドロイドではないと解つてしまつたら、わたしの存在価値はなくなつてしまつ。そうしたらもう、あそこにいる理由は、なくなつてしまつ」「どうして？　あなたが隆にいにとつて、うつん、私たちにとつても大切な存在だつたことは、確かなのよ。いられなくなる事なんて、なかつたと思うわ」

いいながら、でも妙なことだと思つた。

どうして伯父は、わざわざアンドロイドだなんて、言つたのだろう。別に彼がアンドロイドである必要は、なかつたのではないか？

「いいえ、いられなくなつたでしよう。あなたは、勘がいいのだから

「うう」

ふと視線をあわせ、彼は微笑んで見せた。

「伯父さんはどうして、あなたをアンドロイドだなんて言つたのかしらね。別に、そうである必要はなかつたはずよね」

「いいや、それどころではない。

アンドロイドであつては、困るのではないか？

もしも隆にいが、こんな時期に亡くならなければ。

もしもあと一年も一年も生きていたなら。

彼は、成長するだろ？。

アンドロイドが、成長することになる。

そうしたらどうしたのか……。

「ちょっと、ちょっと待つて。

まさか……」

もしも、隆にいがこんな時期に。

その時期が。

「まさか、まさか隆にいは……」

わたしは、目が回るのを感じた。

自分の立っているところが一体どこなのか。位置しているのは果たして地面なのか。

わからなくなっていた。

隆にいが。

「コーラインではないのなら、隆にいが！

「ほら、やっぱりあなたは、勘がいい」

泣きそうな笑顔で、コーラインが言つ。

いいや、泣きそうだったのは、わたしだ。

「隆にいは、じゃあ……」

「そうだよ真由子。隆人が、アンドロイドだったのだ

いつか戸口に、伯父が立つていた。

「あるいはもつと卑くに、気がつくかと思つていたのだがな。案外、

もつたな」

伯父は部屋の中にはいると、いかにも大儀そつて、コーラインの隣に腰を下ろした。

ますます、歳をとつていた。

「さて、どこから話そうかな。やはり、隆人の事かな

「隆には、いつ死んだの」

やつと、それだけを口に出した。

「おまえが別荘に行つたときには、もう死んでいた。隆人は最後の発作に、耐えられなかつた」

危篤だといわれた。

では、あのときにはもう……。

「だがそれよりも耐えられなかつたのは郁江だ。そしてわたしは、それに耐えられなかつた。これ以上、隆人のほかに、わたしは郁江をも失うのか？それは嫌だ。それだけは、避けたかつた」

伯母は、精神的に脆い人だつた。

私は、別荘で最初に見た伯母の様子を思い出していた。

「アンドロイドの研究は、もう一步の所まで来ていた。出力としての身体は、充分に実用に耐えうるだろう。しかし、情報を統合する知能の方は、まだまだ大きすぎる。到底、ヒトの身体の中には收まらなかつた。それで、思い切つて頭脳は外側において、身体は端末に徹することにした。隆人の部屋の隣には、大きな人工知能があつたのだよ」

ユーリンが立ち上がり、窓にもたれた。

雨が降り出していた。

ああ、そう言えば私は、隆にいがあの部屋から出たところを、見ていない。

そうか。機械だつたのだ。

優しかつた隆には、笑つていた隆には、すべて作り物だつたのだ。

「いづれは無理がでる。小さな綻びを繕うために、私はユーリンに助けをもとめた。私自身が始終そばにいられたなら問題はなかつただろうが、そうはいかない。それに、何かブラフが必要だつたのだ。郁江は……、隆人の死を認められない郁江は、簡単に信じるだろうが、お前はそうはいかないだろ？必ず、どこかおかしいと思うはずだ。

一生だませるとは、もちろん思ってはいない。郁江が隆人の死を受け入れられれば。隆人との間に、もつとふつつの、温かい思い出ができれば。それまでの間でよいと思った。

研究所で助手のアルバイトに来ていたコーラインに、私は助けをもとめたのだよ

でも伯父さん、どうして私までを、騙さなければならなかつたの。私には、打ち明けてくれてもよかつた。

伯母さんを守るためにだけならば、決して私に、うそをつく必要は、なかつたはずだ。

「嘘よ。伯父さん、嘘をついている。伯母さんのためだけじゃないんでしよう? 私がどこまで騙せるのか、試してみたかつたんじよう……?」

でも、だめよ。私だつて、騙されていたかつた。優しい隆にいに、いつまでもいつまでも、騙されていたかつた。

「私だつて、モニターには、なりはしないわ」

泣いた。

伯父は、何も言わない。

その無言の肯定を受けて、私は泣いた。

「でも俺は、楽しかつたよ」

その時に、突然、コーラインが言つた。

あの優しい表情で、私の顔を覗き込んでいた。

「博士や奥さんや、そしてあんたと過ごした間、俺はすくなく、樂しかつたよ」

私はすがるよに、コーラインを見つめた。

「あんたを騙していることが苦しかつたけれど、俺はずつと、あままでよかつた。あのままあんたが笑つているのを見ていたかつたよ」

でも、それではあなたは、認められないままだ。私の中でのあなたは、ずっとアンドロイドのままだ。

「俺はそれでもよかつたよ。本当は、あのまま消えていたかつたよ。

だからたぶん隆人さんも、同じだ。きっとあなたの……、あなたの笑顔を、見ていたかつたはずです、真由子様。私の笑顔を、見ていたかつた？ 隆にい。

本当に？ 本当に……？

涙は止まらなかつた。でもその涙は、少しだけ違つたものになつていた。

「ヨーイン」

それはたぶん、私の聞きたかつた言葉。私が求めた、唯一のことば。

「……ありがとう……」

その後のヨーインは、また元のように伯父の助手に戻つていつた。伯母は正氣を取り戻し、今では笑つて、隆にいの話しができる。伯父は研究を続け、私はその後を継いだ。

新聞の記事は、こう結んでいた。

いつか彼らは、感情を持つといつ。そつ遠くない未来、我々は彼らを、どう考えればよいのだろう。

その答えは知つてゐる。

私とヨーインだけは、知つてゐる。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6582c/>

あの夏のわたしたち

2010年10月8日15時31分発行